

2019 年を境に、衰退が見られる。

加賀海岸のタイトゴメ (石川県加賀市加賀海岸)

タイトゴメ の和名は、中国から伝わった「大唐米」の意味である。葉の形状が、小さく赤味を帯びた大唐米に似る事による。江戸時代には赤米と呼ばれて、下等品扱いであったという。

黄色い星状の花を付ける、ベンケイソウ科マンネングサ属の植物は、どれもよく似ていて、同定が難しい。特に、海岸の岩場等に咲くこのタイトゴメ とメノマンネングサ はよく似ている他、変異が多いので、同定は諦めて、長い間見て見ぬ振りをしてきた。

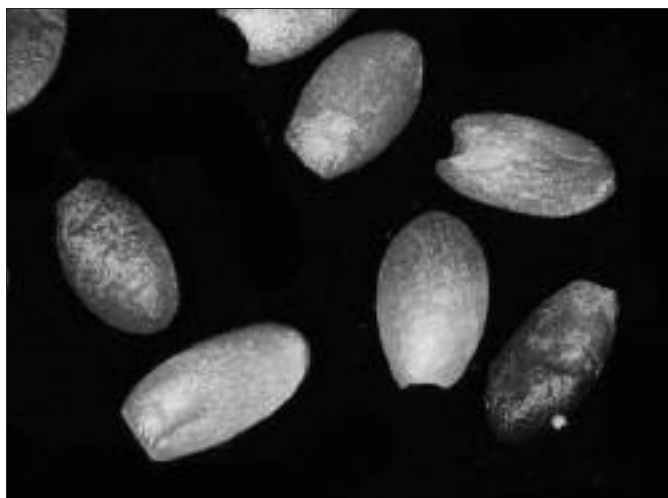
2019 年、近く有加賀海岸の岩場で見事な群生を発見した。流石に、見て見ぬ振りができなくなって、同定をすることとなったのである。しかし、専門家に伺うが、なかなか見えてこない。

平凡社の「日本の野生植物」によれば、メノマンネングサ、タイトゴメ・・・は(中略)、すべて同一種内の亜種及び変種と考えられる。との記述により、両者は形質的にはほぼ同じで、葉の形状に違いがあると判

断して、例の岩場の葉を手にとって見てみることにした。すると、触っただけで丸い葉がポロポロ落ちるではないか。そして、落ちた葉を見て確信したのである。正に大唐米そのものであった。

余談ではあるが、同じ加賀海岸には7月に咲くメノマンネングサ と思われる小さく弱々しい植物がある。ところが、福井県三国町の雄島、常神半島では5月下旬に咲くメノマンネングサ がある。こちらは植物体が大きくしっかりとっている。形質的には違いが見えないが、明らかに違う植物。マンネングサ属の植物は、まだまだ研究が必要な分野だと実感した。

翌年の2020年、気になって同じ時期に岩場を訪れてみると、黄色い花が激減していた。他のマンネングサは毎年同程度密に花を付け、年による変化がない。株そのものは減ってはいないが、どうしたものか。自然界は、気が付かないうちに、静かに変化が起きているのは間違いないようだ。



タイトゴメの葉。小さく赤い。
手で触るとポロポロ落ちて、
まるで米粒。名前の由来。



2019 年の群生風景



2020 年の風景。明らかに花数が激減している。